

男性看護師のやりがいに関して

—院内男性看護師の面接調査からの分析—

キーワード 男性 看護師 やりがい

手術部○村住英也 前田幸子 羽場庸子 帰山絵津子

はじめに

日本看護協会による病院看護基礎調査¹⁾²⁾によると、この10年間で看護師養成学校への男性入学者の割合や男性看護師の増加率は高くなっており、配置場所についても「精神科以外」が着実に増えつつあり、男性看護師は少数ながら、量的にも増加、職務領域も拡大の傾向にある。しかし、看護職全体の約96%が女性で構成されており、男性は約4%という少数の存在であり、また、「看護は女性の職業」といった社会的固定観念がある。そのため患者に対するケアや関わりの中で不都合さや困難さ、それによる葛藤を抱く事があるということが先行研究³⁾⁴⁾からも言われている。このような問題は、看護の専門職化を阻むばかりでなく、看護に参入しようとする男性を遠ざけることにもなる。

男性看護師が増加するなかで、私たち男性看護師自身が「やりがい」を持って看護を行っている姿が、看護サービスの受け手である患者や男性看護師の社会的認知、臨床で働く看護師、そして看護教育に様々な影響を与えると考えた。

そこで、本研究は、男性看護師を対象としたインタビュー調査を行い、男性看護師のやりがいとなっているものを研究しようと考えた。また、この研究により男性が看護師として「やりがい」をもって働けるためには、何が必要なのかを考える上の一助となると考えた。

I. 用語の定義

やりがい

中村ら⁵⁾の分類した、看護職が「職場でやりがいを感じる時」を参考にした。

II. 研究目的・目標

当院における男性看護師のやりがいとなっているものを明らかにし、考察することを目的とし、男性看護師が、やりがいを持って働けるためには何が必要なのかを考える一助とすることを目標とする。

III. 研究方法

1. 期間

2006年5月～9月

2. 対象

当院の男性看護師16名

3. 調査及び分析方法：データ収集・分析

本面接前に、心理学的所見からのやりがい、看護師のやりがいや意識調査に関する研究や男性看護師の職務意識に関する研究について学び、プレテストを行い面接内容・形式を検討し、インタビューガイドを作成した。

データ収集は、対象者にインタビューガイドを使用し、個別に半構成的面接を行なった。事前に、同意を得て、面接中の面接者と対象者の会話は、テープレコーダーで録音した。

データ分析は、16名の対象者から得られた面接内容をすべて逐語録に起こし、やりがいに関する文脈を抽出し、コード化とした。この『コード』が表す、やりがいとなっているものが、どういう意味を持つのかを解釈し、類似したものに分類し、サブカテゴリーとした。サブカテゴリーを分類し抽象度を高め、カテゴリーを抽出した。

4. 倫理的配慮

対象者には文書を用いて、研究の趣旨、研究参加及び辞退は自由意志であること、秘密を厳守することを説明し、同意署名を得た。データは研究者以外にはもれないように管理し、研究終了後に破棄した。

IV. 結果

1. 研究対象者および分析対象データ

本研究のデータは、当病院に就業する男性看護師16名が、半構成的面接において回答した内容である。

対象者の特性

1) 臨床経験年数

対象者の臨床経験年数は、1年目から26年目の範囲である。

2) 所属病棟

精神科、HCU、ICU、整形外科、内科、血液浄化部

2. 男性看護師のやりがいとなっているもの

男性看護師のやりがいに関するカテゴリーを【 】, サブカテゴリーを[], コードを『 』で示す。

1) 【看護師としての喜び、成長や役割・評価を得ている】

この概念は、[患者・家族からの信頼・感謝の言葉や改善していく姿が、看護師としての喜びを感じさせてくれる] [自己の成長、役割・評価を実感する] の2つのサブカテゴリーより抽出された。

【患者・家族からの信頼・感謝の言葉や改善していく姿が、看護師としての喜びを感じさせてくれる】では、『病と闘い、付き合っていくために必要な知識や技術、精神的強さを獲得していけるように、介入している』『一生懸命関わった分、患者の改善や感謝の言葉が、次のがんばりにつながる』とあるように、患者やその家族と向き合い、看護師として一生懸命関わっていく中で、患者が病と向き合い、本来のまた、新たな健康を獲得していく姿を看ることが出来る。それにより、患者や家族からの信頼感や感謝の言葉が聞け、看護師としての喜びを実感することが明らかになった。

『院外活動や自己学習により、自己の成長と看護師としてのスキルアップを感じる』『患者を理解し、その人に合った看護が展開することができ、看護の視点が広がったことを感じる』などからは、患者にあった看護展開ができたことで、自己の成長や役割、また、それによる評価を実感していることが明らかになった。

2) 【スタッフ間の理解や協力が、チームの一員としての自覚となる】

この概念は、【性差を意識せず、専門職である看護師としての自覚を持っている】【男性女性看護師とも、お互いの特徴（長所、性差）を理解し、それを活かそうとする協力意識がある】の2つのサブカテゴリーより抽出された。

【性差を意識せず、専門職である看護師としての自覚を持っている】では、『男性だから女性だからという意識はなく、一人のスタッフとして、信頼し合い集中して業務に取り組める』『医師も含め、男性女性看護師関係なく、専門職者として協力し合うことで、医療チームの一員であると感じる』とあるように、医師も含め、スタッフ間では、男性看護師、女性看護師の性差の意識はなく、医療チームの一員として、信頼し合い看護業務・医療を行なっている一人の看護師としての自覚が明らかになった。

【男性女性看護師とも、お互いの特性（長所、性差）を理解し、それを活かそうとする協力意識がある】では、性差を意識せず、一人の看護師として業務を行ないながらも、患者への配慮やお互いの長所を考慮したほうが、よりよい看護、患者側に立った看護提供につながることもある。そのため、『患者の状態や、症状により、女性看護師だけでは対応できないときがあり、男性看護師がサポートに入っている』『女性患者のプライバシーがかかわるケアに関しては、女性看護師に頼むことがある。男性患者のときは、逆に頼まれることがあり、スタッフ間での協力意識があり、患者も看護師も精神的負担が軽減する』とあるように、お互いの特性を理解した上で、患者側に

立った看護を提供するために、業務やケアを交代できる協力意識がスタッフ間にあることが明らかになった。

3) 【男性看護師の存在を、看護の幅の広がりとして感じる】

この概念は、【体力面だけではなく精神面においても患者からの信頼感や必要性が感じられる】【性差の違いを、看護提供の一つの選択肢として捉える】の2つの概念から抽出された。

【体力面だけではなく精神面においても、患者からの信頼感や必要性が感じられる】では、体力面において、『男性の力強さは、安楽に安心して移乗や力のいる介助ができ、苦痛に苦しむ患者にとって、それが重要なことであり信頼感を得られる』と述べられている。また、『体力面だけではなく、男性に聞いて欲しい事や、やって欲しい事もあり、精神面においても、患者から必要とされている』や『男性の声のトーンや存在が、威圧感として捉えられるのではなく、安心感や説得力になっていると思う』より、精神的な面においても、患者からの必要性を感じていることが明らかになった。

【性差の違いを、看護提供の一つの選択肢として捉えている】では、『男性看護師も女性看護師も、それぞれの長所を活かすことで、患者が選択することができ、要求に応えたケアができる』より、男性女性看護師の存在を、患者が選択できる看護提供として活かそうとしている。また、『男性看護師がいることで、違う視点の意見も出て、患者理解や看護の活性化につながる』から、男性看護師の視点や意見を、患者をより理解し、看護を提供する上での、看護の幅の広がりと感じていることが明らかになった。

V. 考察

男性看護師のやりがいとなっているものを表す3つのカテゴリーの特徴と、男性看護師がやりがいを持って働くために何が必要かを考察する。

1. 【看護師としての喜び、成長や役割・評価を得ている】

看護師としての喜びとは、患者との関わりの中から生じる、健康を獲得していく姿を看ことや信頼関係・感謝を実感することだと考えた。田尾⁶⁾は、「看護婦にとって患者との関係は、仕事上の悩みの種となると同時に、仕事に生きがいを感じたり、喜びを感じる源であることが示されているのである」と述べている。また、中村ら⁷⁾の、職場でやりがいを感じた時では、「患者との信頼関係及び評価」「仕事の達成」「努力の承認・評価」が上位を占めていることから、【看護師としての喜び、成長や役割・評価を得ている】がやりがいとなっているとわかる。

つまり、性差に関係なく、患者と向き合い、努力している看護師が得ることができる、看護師としての一般的なやりがいとなっているものと考えた。

2. 【スタッフ間の理解や協力が、チームの一員としての自覚となる】

わが国の男性看護師数は、年々増加している。しかし、女性看護師数との比率はほとんど変化しておらず⁸⁾、当院における傾向も同様である。男性看護師は、今後も看護職集団における少数者として存在し続けると予測される。松田ら⁹⁾は「看護職集団における少数者である男性看護師が、自己の異質性を強く意識する存在である」と言い、また、「少数者である男性看護師が女性多数環境において孤立を自覚する自体は回避できない」と述べている。しかし、本研究では、性差に関係しない専門職の看護師としての自覚や、患者の立場に立った看護を提供するための協力意識は、少数者である男性が抱きやすい「孤立の自覚」ではなく、「看護もしくは、医療チームの一員としての自覚」となり、看護師としての自立や自信を得て、それがやりがいとなっていると考えた。

3. 【男性看護師の存在を、看護の幅の広がりとして感じる】

このカテゴリーは、男性看護師の行なう看護に対して、女性との差異や優劣をあらわしているのではない。松田ら¹⁰⁾は、「ステレオタイプ的な男性イメージで男性看護師を捉えるのではなく、個人の能力・適正を重視するといった個性の尊重、言い換えればジェンダーフリーの認識が必要」と述べている。看護師としての専門性を高める上でも、「男らしさ、女らしさ」というジェンダーからの脱却は必要と考えられる。しかし、現実的に、性を含めた患者の全体を把握し、看護を提供するうえで、ジェンダーフリーの認識だけで十分であるのだろうかと感じた。実際、面接内容からも、男性が患者から必要とされるとあり、性も含めたその人らしさ、それを活かした看護が評価されていると感じた。つまり、男性女性看護師の存在や役割に対して、「セクシャリティ」という概念で捉えることも必要であると考えた。すなわち、性を含めた、自分らしさを看護の中に活かすことができ、その看護が、患者や女性看護師からの信頼や評価を得ることにより、看護提供の幅の広がり捉え、男性看護師の必要性や存在意義を感じ、やりがいとなっていると考えた。

4. 男性看護師がやりがいを持って働くために

金坂ら¹¹⁾は「本来看護に求められているものは、専門性である」と述べているように、看護師として病状の把握、適切な説明、看護技術といった専門性を身につけ、患者に看護を提供することで、看護師としてのやりがいを得ることができると考えた。ま

た、医療チームの一員としての自覚を持つためには、性差を意識することなく、医療スタッフが、それぞれの役割を理解し、またお互いに協力していこうとする意識や行動が必要と感じた。その中で、男性女性看護師の存在や役割について、「セクシャリティ」の視点から捉え、それを活かした看護を提供することで、質の高い看護や自分らしさを感じ、やりがいとなると考えた。

VI. 結論

1. 男性看護師のやりがいとなっているものは、【看護師としての喜び、成長や役割・評価を得ている】【スタッフ間の理解や協力が、チームの一員としての自覚となる】【男性看護師の存在を、看護の幅の広がりとして感じる】の3つのカテゴリーと6つのサブカテゴリーが挙げられた。
2. 男性看護師がやりがいを持って働けるためには以下の3つがあげられる。
 - 1) 専門職者としての看護能力を高める
 - 2) 医療スタッフの協力意識が、医療チームの一員としての意識を自覚する
 - 3) 男性女性看護師の存在や役割を「セクシャリティ」の視点から捉え、看護援助に活かす。

引用文献

- 1) 日本看護協会：日本看護協会調査研究報告 1991年病院看護基礎調査, p41-42, 1993
- 2) 日本看護協会：日本看護協会調査研究報告 1999年病院看護基礎調査, p42, 2001
- 3) 井出彩他：一般病棟における男性看護師のイメージに関する調査, 共済医報, 52(3), p246-249, 2003
- 4) 多間嗣郎：男性看護師のケアの受け入れに関する研究, 金沢大学医学部附属病院看護研究論文集録, p117-120, 2005
- 5) 中村あや子他：看護婦の仕事意欲に関する研究, 新大医保紀要 7(3) : p309-313, 2001
- 6) 田尾雅夫：ヒューマンサービス業務における二律背反, パーンアウトの捉え方について, 看護展望 14, 50-51, 1989
- 7) 前掲書5)
- 8) 看護問題研究会監修：平成14年看護関係統計資料集, 日本看護協会出版会, 8-13, 2002
- 9) 松田安弘他：男性看護師の職業経験の解明, 看護教育研究, 13, 1, p9-21, 2004
- 10) 前掲書8)
- 11) 金坂尚子他：「期待度」「満足度」調査結果から見た看護サービスの検討, 日本看護学会論文集, 第33回看護管理, p284-286, 2003

表：男性看護師のやりがいとなっているもの

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
看護師としての喜び、成長や役割・評価を得ている	患者・家族からの信頼・感謝の言葉や改善していく姿が看護師としての喜びを感じさせてくれる	病と闘い、付き合いしていくために必要な知識や技術、精神的強さを獲得していけるように、介入している
		一生懸命関わった分、患者の改善や感謝の言葉が、次のがんばりにつながる
		痛みや苦しみが強い時期だけにしか関わっていないのに「あの時はよくしてくれてありがとう」と自分のことを覚えていてくれた
		「この人ならよく病状をわかっている」とか「～さんをお願いします」などから、信頼されていることを感じる
	自己の成長、役割・評価を実感している	患者を理解し、その人にあった看護が展開することができ、看護の視点が広がったことを感じる
		院内活動や自己学習により、自己の成長と看護師としてのスキルアップを感じる
		ベテラン看護師として、スタッフからの信頼を得られ、支援する役割がある
		患者の対応や視点等の引出しが増え、上手く関わることが多くなってきたと思う
		自分が自信を持っている看護技術があり、それにより高い評価を得ている
		自分のやるべきことを一生懸命行い、評価を得て、次のステップにしていき、少しずつ上を目指したい
スタッフ間の理解や協力が、チームの一員としての自覚となる	性差を意識せず、専門職である看護師としての自覚を持っている	男性だから女性だからという意識はなく、一人のスタッフとして、信頼し合い集中して業務に取り組める
		患者にあった看護の方向性やケアについて、スタッフ間で話し合い、協力し合っている
		医師も含め、男性看護師、女性看護師関係なく、専門職者として協力し合うことで、医療チームの一員であると感じる
	男性看護師女性看護師とも、お互いの特性（長所・性差）を理解し、それを活かそうとする協力意識がある	患者の状態や症状により、女性看護師だけでは対応できないときがあり、男性看護師がサポートに入っている
		女性患者のプライバシーがかかわるケアに関しては、女性看護師に頼むことがある。男性患者のときは、逆に頼まれることがあり、スタッフ間での協力意識があり、患者も看護師も精神的負担が軽減する
		自分が出来ないケアを代わってしてくれた人の仕事を代わりに自分がすることで、スムーズに業務が進行する
男性看護師の存在を、看護の幅の広がりとして感じる	体力面だけではなく精神面においても患者からの信頼感や必要性が感じられる	男性の力強さは、安楽に安心して移乗や力のいる介助ができ、苦痛に苦しむ患者にとって、それが重要なことであり信頼感を得られる
		体力面だけではなく、男性に聞いて欲しい事や、やって欲しい事もあり、精神面においても、患者から必要とされている
		男性の声のトーンや存在が、威圧感として捉えられるのではなく、安心感や説得力になっていると思う
	性差の違いを、看護提供の一つの選択肢として捉えている	男性看護師も女性看護師も、それぞれの長所を活かすことで、患者が選択することができ、要求に応えたケアができる
		男性看護師がいることで、違う視点の意見も出て患者の理解や、看護の活性化につながる